

21歳 高校の仲間たちと『白樺』創刊
 25歳 声楽家の女性と結婚
 36歳 「民藝」の言葉を創る
 47歳 日本民藝館を開館

vol. 14

柳 宗悦

Yanagi Muneyoshi

自由な心と眼差しで手仕事に宿る「美」を見出した民藝運動の父

高校の仲間たちと文学雑誌を創刊

柳宗悦は1889年（明治22年）、現在の東京・六本木にあたる地で生まれた。武家の出身である父は和算の大家と呼ばれるほど数学に秀で、西洋の測量技術も身につけていた。その技術を生かし海軍少将として活躍したが、宗悦が2歳にならないうちに他界している。シングルマザーとなった母は、宗悦の妹を含め幼子5人を女手一つで育てなければならない。ただ、最後は貴族院議員となっていた父が遺した家もあり、経済的には恵まれていた。その上、柔道家であり教育者の嘉納治五郎を弟に持つ母は、気丈な性格だった。

宗悦は学習院高等科を卒業後、東京帝国大学哲学科に進学するが、それと前後して、後の人生に関わる2つの出来事があった。1つは高校時代の仲間たちと共に文学雑誌『白樺』を創刊したこと。文学作品がメインだが、宗悦は論文や西洋美術の紹介文などを寄稿した。美術館などほとんどなかった時代、仲間たちと西洋美術を写真で見せる展覧会を開催したり、著名な彫刻家ロダンへ直接手紙を送るほど、西洋美術への憧れは強かった。

もう1つの出来事は、音楽学校で声楽を学ぶ女子学生との出会い。当時としては珍しく自分の意見をはっきり言う女性で、芸術への関心も高かった。数百通の手紙をやり取りし、結婚を意識し始めたものの、果たして女性が声楽家としての仕事と家庭を両立できるのか？ 難問を前に宗悦は彼女と悩んだ末、「2人でなら乗り越えられる」という結論にたどり着いた。



1889年東京生まれ。東京帝国大学哲学科を卒業後は東洋大学教授などを務めつつ新聞や雑誌での連載、書籍出版も。妻と共に朝鮮やアメリカを訪れた際には、自身は講演会や大学での講義、妻は音楽会を開催するなど、夫婦揃ってグローバルに活躍した。

心を奪われた日常の器物との出会い

宗悦は大学を卒業した翌年、25歳で結婚する。宗教哲学の研究と執筆活動に勤しみ、大学で教鞭も執っていた彼の下には、外国人を含め多くの客人があった。ある日、その一人が手土産で持ってきた壺に心を奪われた。朝鮮時代に作られたという日常の器物に宿る「美」を見出したのである。以来、宗悦は幾度も現地を訪れた。その眼差しは日本国内にも注がれていく。京都に住んでいた36歳の時には、親交が深かった陶芸家らと共に、無名の職人たちの手から作り出される生活道具を「民藝」と名付けた。

民衆の工芸を意味する「民藝」は美術工芸に勝るとも劣らないとし、その素晴らしさを伝える本を書き、展覧会を開いた。宗悦らの民藝運動は、多くの賛同を得ながら全国に広がっていく。47歳の時には民藝を蒐集展示する日本民藝館を開館させ、初代館長に就任した。明治、大正、昭和と近代化を突き進む時代にあって、西洋化や物質的な豊かさだけを追い求めるのではなく、風土に根ざした文化の豊かさやより良い生活とは何かを、民藝運動を通じて伝え続けた。

日本各地をはじめ朝鮮、中国、ヨーロッパ、アメリカと精力的に訪れ調査研究に打ち込んでいた宗悦は、67歳の時、心不全で倒れ左半身不随となる。入退院を繰り返しながらも執筆の手を止めることはなかったが、1961年（昭和36年）、脳出血により他界。既成概念や古い価値観にとらわれない自由な心と眼差しで、芸術と文化、その精神を追及し続けた72年の生涯だった。

（執筆／ライター 篠田 りょうこ）